

第86回

『光る海』で難役を好演した
デビュー前の石川さゆり

私が大学3年だった昭和47年秋から48年春にかけて、思い出深いテレビドラマがフジテレビ系列で放送されました。沖雅也、島田陽子、中野良子が共演した『光る海』です。

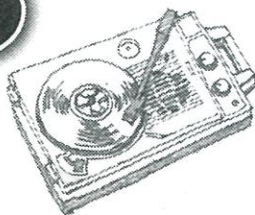
石坂洋次郎原作の青春小説のドラマ化で、邦画ファンやサユリストならご存じのように、すでにその9年前、東京五輪開催年の正月興行として日活が映画化、吉永小百合、浜田光夫らの青春スター総出演で盛り上がり、佐伯孝夫と吉田正の手による青春歌謡の王道を行くような同名主題歌は、主演の吉永が歌っていました。

『光る海』はテレビでも何度か映像化されているようですが、吉永小百合と結婚前だった岡田太郎演出によるフジテレビ版は、昭和40年のTBS版に次ぐ作品で、島田陽子の妹役に『初恋のメロディー』でデビューしていた小林麻美、沖雅也の妹役にはレコード・デビュー前、14歳だった石川さゆりが出演していました。石川さゆりの芸名を名づけたとき

れる岡田ですが、彼女に少々おしゃまな役柄で垢抜けた山の手少女を演じさせ、放送コードに抵触するよう

名曲カルテ

昭和歌謡と
いまでも
堀井六郎
絵・松本浦



な台詞を言わせて視聴率アップを狙い、彼女はその起用に屈託ない演技で応えました。

日活作品同様、清純派女優や年端のいかない少女らが口にするセックス関連のきわどい会話は、昭和40年代後半の世情においても現実には忌避されて仕方ない雰囲気が残っていたので、私は、家族の反応を気にしつつ無表情を装い、小林麻美と石川さゆりの少ない出番のシーンを楽しんでいました。

番組の主題曲として使用されたフランク・プウルセル楽団演奏の『アドロ』も大ヒット、大学卒業後、私は小沢昭一にあこがれて、勉強のため（嘘です）首都圏のストリップ劇場を巡回したことがありましたが、



クライマックスで使用される楽曲のベスト3は、レーモン・ルフェール楽団『シバの女王』、ジェーン・パーキン&セルジュ・ゲンスブール『ジュ・テーム・モア・ノン・プリユ』そして、この『アドロ』でした。

閑話休題、『初恋のメロディー』は、その頃すでに私の愛唱歌になっていたこともあって、美少女・石川さゆりの番組後の進路が気になりましたが、番組終了と同時に『かくれんぼ』でデビューを飾ることが判明、ただし、『月刊明星』に掲載された新人情報に「石川さゆり」の活字を見つけたとき、ポップス系歌謡曲を期待していた私としては、少々肩透かしをくらった気持ちになったことを覚えていきます。

石川の歌のルーツが島倉千代子の『からたち日記』『恋しているんだもん』や大正期の流行歌『船頭小唄』などの叙情歌謡の世界だったことを知るのには『津軽海峡・冬景色』などの旅情三部作でブレイクしたあとになります。

デビューは1学年下の桜田淳子に遅れること28日、わずかの差でしたが、『スター誕生！』が生んだ当時最大のスター、桜田淳子の影も踏めず、その背中は遠のくばかりでした。